

機関番号：37104

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530547

研究課題名（和文）ターミナルケアにおける医療福祉ニーズの実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of Needs for Health, Medical Care and Welfare Services in The Terminal Care

研究代表者

片岡 靖子 (KATAOKA YASUKO)

久留米大学・文学部・准教授

研究者番号：30389580

研究成果の概要（和文）：本研究は、ターミナルケアにおける医療福祉ニーズについて、九州圏域におけるがんターミナルに関わる医療機関の実態調査及びがんターミナルに関わる医療ソーシャルワーカーへのインタビュー調査、事例検討を通して、がんターミナル患者及び家族がどのような医療福祉ニーズを抱えているかについての提示を試みた。これらの研究から明らかとなったことは、医療圏ごとのがん治療に関連した供給体制の偏在が存在するという事実と、患者及び家族の医療福祉ニーズ発見の立場にあるスタッフとして看護師が重要であることが先ず示唆された。一方、がんターミナル患者の医療福祉ニーズへの医療ソーシャルワーカーによる対応は、多くの相談が医療費を巡る相談、転院及び在宅への退院調整の役割に限定されていることが提示された。このような状況の中で、がんターミナル患者及び家族の抱える医療福祉ニーズは、「痛みのコントロール」が最も高く、緩和ケアの技術の普及が急がれることが提示されている。また、医療スタッフから提示された医療福祉ニーズとして、在宅もしくはホスピス病棟での看取りがベストとの回答が多く、在宅での看取りのシステム構築とホスピス病棟の不足が課題であることが提示された。

研究成果の概要（英文）：This study on needs for health, medical care and welfare services in terminal care, tried to clarify, in the method, related interviews of medical social workers, research on medical institutions and case studies. It became clear from these studies were underdeveloped and ubiquity of medical provide system, that is important to discover the needs of nurses, medical social workers have not been stationed at palliative care team.

While, medical social workers, medical expenses related the problems became clear that adjustments to solve the problem by moving to another hospital and discharged.

In these conditions, the needs of patients with terminal cancer, was presented to be the highest priority of pain control. And it s important suggested that technology diffusion urgent palliative care, too.

The medical staff responded, in the report, hospice care-giving is the best, and then home medical care. Suggested to be an issue of lack of hospital services and underdeveloped healthcare system try for at home care-giving, however.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医療福祉学、ソーシャルワーク
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ターミナルケア・医療福祉ニーズ・地域医療福祉連携・医療ソーシャルワーク実践過程

1. 研究開始当初の背景

わが国の死亡要因として、がんによる死亡が第一位となっており、今後、ターミナルケア体制の確立が急務である。一方、福祉領域におけるターミナルケアは、患者の持つ身体的、精神的、社会的、さらに霊的なニーズに対応するケアの構築が必要であるとされている。緩和ケアは、医療ケアではなく、全人的ケア、またはソーシャルケアであるともされているが、その体制や方法論についての提示が乏しいのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ターミナルケアにおける医療ソーシャルワーカーの役割と実践過程の分析によりターミナル期の患者の抱える医療福祉ニーズを明らかにしていくことにある。

3. 研究の方法

研究方法としては、ターミナルケアにおける医療福祉ニーズを明らかにするために、予備調査として、特定機能病院、一般病院、回復期病棟、緩和ケア病棟、療養病床を持つ医療機関に所属する医療ソーシャルワーカー、医師、看護師、作業療法士、理学療法士、介護福祉士などを対象にインタビューを実施した。

次に、インタビュー調査を下に、九州圏内におけるターミナルケア実施状況について、医療機関に対し、「がん患者のターミナルケアに関する調査」を、1,321の医療機関を対象に実施した。調査内容としては、ターミナルの患者及び家族の抱える経済的、心理的、身体的、生活上、転院上などの問題について問うとともに、ターミナル期の患者をめぐる地域医療福祉連携の課題、スタッフ教育の必要性などの回答も求めた。

上記の調査の内容を下に、医療ソーシャルワーカーによるターミナルケア期の患者及び家族へのソーシャルワーク実践事例の収集及び分析を行った。

加えて、ターミナルケアにおける社会資源調査を併せて行った。

4. 研究成果

(1) 医療福祉ニーズ

本研究過程で明らかになったことは、ターミナル期の患者にとって、最も必要とされる医療福祉ニーズは、痛み

のコントロールが可能となることで、ターミナル期の患者のQOLが向上し、患者及び家族の抱えるさまざまな医療福祉ニーズへの対応可能となることが示唆された。さらに、患者及び家族の抱えるニーズ発見として看護師の存在が重要であり、看護師の心理社会的な問題をアセスメントしていく視点及び知識の獲得が重要であることが示唆された。

痛みのコントロールが先ず優先される課題として提示されたが、次に表出した課題としては、経済的問題が大きな課題となっていた。特に、中高年のがん患者の医療費及び生活費の問題は深刻であった。治療が長期的に必要となるだけでなく、対応できる社会資源としては、高額療養費、傷病手当金制度などに限られており、十分な就労が困難となり、さらに生活費に困窮している状況が提示された。民間の生命保険など、リビングウィルなどの契約を行っているケースにおいては、当面の経済的対応が可能となるケースはあるものの、働き盛りの中高年のがん患者の経済的問題が大きいことが示された。

さらに、看取りの場面において、在宅での看取り、もしくは緩和ケア病棟（ホスピス）が適切との回答が多いことも提示された。しかし、在宅で継続した医療及び看護が保障されていない在宅医療システムと、緩和ケアが可能である地域医療体制が不足している現状も明らかになった。さらに、緩和ケア病棟への転院についても、緩和ケアが可能であるベッドの絶対数の不足が提示され、転院を待てずに亡くなるケースが多々報告された。

(2) 医療ソーシャルワーカーの配置状況

一方、ターミナル期の患者及び家族への医療ソーシャルワーカーによるアプローチの実態としては、多くの課題が提示された。

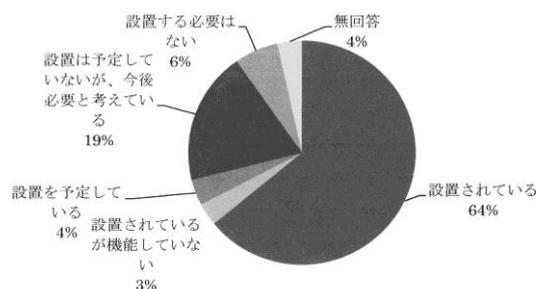


図-1. 地域医療連携の設置の有無

まず、医療ソーシャルワーカーの配置状況として、地域医療連携室に配置されてはいるが（図-1、図-2）、緩和ケアチームに組み込まれている医療機関が乏しいという結果が示された。（図-3）

地域医療連携が設置されていると回答した医療機関数は全体 1,321 医療機関のうち、64%を占めており、設置を予定している、設置は予定していないが、今後必要と考えているとの回答を含めると、90%を占めている。

さらに地域医療連携室を設置している医療機関における医療ソーシャルワーカーの配置についても 79%を占めており、医療ソーシャルワーカーが、地域医療連携における役割が期待されていることが示されている。

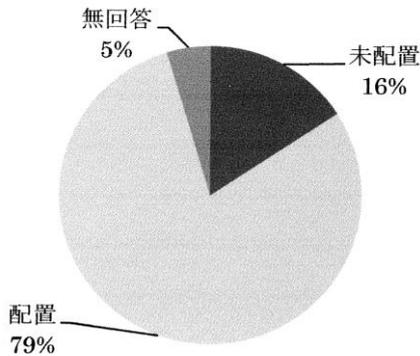


図-2. 地域医療連携室における医療ソーシャルワーカーの配置の有無

しかし、緩和ケアチームに医療ソーシャルワーカーを配置しているとの回答は、わずかに 13%であり、ターミナル期の患者及び家族への支援における医療ソーシャルワーカーの役割が理解されていないことが伺えた。この背景には、ターミナル期の患者の医療福祉ニーズの最も優先される課題が痛みのコントロールであり、医療専門職によるチーム編成が優先されていることが予測される。

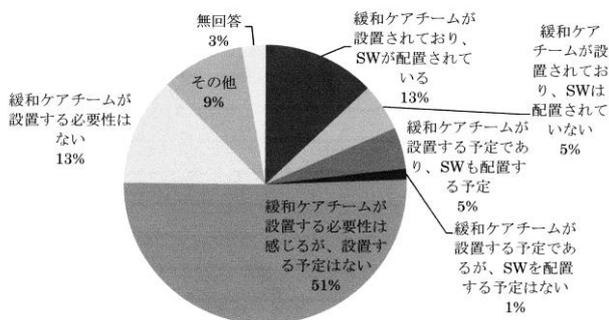


図-3. 緩和ケアチーム設置の状況

このような中で、医療ソーシャルワーカーへの依頼内容としては、点としての経済的問

題の解決、生活費問題への対応、緩和ケア病棟・病院への転院調整、在宅への退院のための退院調整などへの対応が期待されている。医療ソーシャルワーカーへのインタビューの中で提示された思いは、早期からチームの一員として介入することが必要であり、そうすることで、患者及び家族の思いが把握できた上でのソーシャルワーク対応が可能であったとの声が聞かれた。

がんターミナル期の患者への対応は、がんとの診断を受けた時点からのアプローチが必要であり、身体的痛みへの対応だけでなく、精神的・社会的・霊的な痛みへのアプローチをチームで対応していく必要があると考える。即ち、がんとの診断、もしくは告知を受けた時点から、個別の患者及び家族へのチーム編成がなされ、一貫した対応がなされるべきであり、この過程における医療ソーシャルワーカーの役割は大きいと考える。下記の図-4は、現在の緩和ケアの考え方である。医療ソーシャルワーカーによる、がんへの積極的治療上に出る、告知後の本人及び家族の心理的問題への対応、治療継続中の経済的問題、就労問題などへの対応、ターミナル期においては、転院や在宅ケア体制の調整など、死後は、残された家族へのグリーフケア、生活支援が期待されることが予測される。

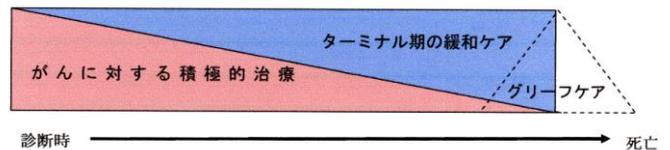


図-4. 現在の緩和ケアの考え方

(3) スタッフ教育

ターミナルケアに関わるスタッフ教育については、今後必要である、また、開催していると回答した医療機関が 97%であるにも関わらず、院内研修、院外研修に派遣しているとの回答は約 13%であり、業務が多忙であること、また研修費用などの経費の問題が予測され、スタッフ教育に対する医療機関への評価及び報酬などの整備が急がれる。

また教育内容についても、クライアントの尊厳・人権意識、痛みの理解、チーム医療が必要との回答が多く見られた。医療ソーシャルワーカーによる回答を概観すると、専門的コミュニケーション技術の獲得、医療知識の獲得、社会資源活用及び開発の方法などが提示された。

(4) ターミナルケアにおける医療ソーシャルワーク実践過程における課題

医療ソーシャルワーカーを対象に、ターミナル期の患者及び家族の抱える医療福祉ニ

ーズに関するインタビュー調査、ターミナル患者の実践事例の収集及び検討を実施した。

先ず、医療福祉ニーズとして提示されたのは、ターミナル期に留まらない、がん患者とその家族の経済的問題が提示された。高額な医療費及び生活費の確保が困難である中高年のケースが多々報告され、治療の手控え、中断、さらに失職による生活維持が困難となるケースが多いことが提示されている。特に、民間保険に加入が困難であったケースへの対応に苦慮していた。

ターミナル期における問題としては、急激に変化する病状への介入のタイミングの困難さ、在宅での看取りを希望しても、地域に看取りが可能である医療供給体制が整備されていないという問題、緩和ケア病棟の絶対数が不足しており、入院待機期間が長く、入院までに死亡される例が多いということ、十分な緩和ケアが提供できないままの在宅への退院など、緩和ケア提供体制、在宅での看取り体制が不十分であることが提示された。

さらに、緩和ケアチームに医療ソーシャルワーカーが配置されていない医療機関が多く、早期介入が困難であることと、転院、在宅への退院などにより、継続的、連続的な関わりができていないケースも報告された。医療ソーシャルワーカーにとっても、ターミナルの患者及び家族への対応が、点としてのニーズへの対応のみが期待され、不全感を抱えていることも提示された。

(5) 結論及び今後の課題

①医療福祉ニーズ

ターミナルケアにおける医療福祉ニーズは、痛みのコントロールが先ず提示されている。しかし、この痛みが、身体的痛みのコントロールが最優先され、精神的・社会的・霊的痛みへの対応が不十分であることが提示された。一方、身体的痛みについても、麻酔医、緩和ケア専門医が一般病院に配置されておらず、十分にコントロールできていない現状も提示された。この背景には、麻酔医の不足、緩和ケア専門医が緩和ケア病棟に限られ、一般病院などに不在であることが原因として挙げられる。また、ホスピス病棟への転院を希望するも、絶対数の不足により、入院することなく死亡に至るケースが多いことも提示されている。身体的な痛みへの専門的対応が保障されることが、患者及び家族の QOL が向上することも提示されており、身体的痛みへの医療供給体制の整備が急がれる。

心理社会的な問題として、がん治療に伴う、経済的問題への対応が必要であることが提示された。しかし、具体的な制度は乏しく、新たな制度創設が求められている。

さらに、在宅ターミナルケアを実施するための地域医療資源の不足が提示された。緩和

ケアが可能な在宅医が不足しているということと、家族介護力の不足により、患者の望む在宅死を実現していくことが困難な状況が提示された。

②医療ソーシャルワーク実践のあり方

緩和ケアチームとして位置づけられることが最も必要な課題であることが提示された。そのためには、緩和ケアにおける医療ソーシャルワーク実践過程とその効果が客観的に提示されることが急がれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3 件)

①片岡靖子「ターミナルケアにおける医療ソーシャルワーカーの役割と課題」第 50 回日本社会福祉学会九州部会大会、2009 年 12 月 19 日、沖縄。

②片岡靖子「九州県下におけるがん患者のターミナルケアの現状と課題-九州県下のターミナルケアにおける医療福祉ニーズ-」第 51 回日本社会福祉学会九州部会大会、2010 年 6 月 27 日、北九州。

③片岡靖子「がんターミナルケアにおける医療ソーシャルワーク実践の実証的研究」日本社会福祉学会第 58 回秋季大会、2010 年 10 月 10 日、愛知。

[その他]

片岡靖子「がん患者のターミナルケアに関する調査報告書」2010 年 3 月。

片岡靖子「九州県下におけるターミナルケアの実態と今後の課題」2011 年 3 月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 靖子 (KATAOKA YASUKO)

久留米大学・文学部・准教授

研究者番号：30389580